

#### 4 本丸北堀跡（北西隅部）出土の黒鯨瓦（くろしやちがわら）

今回発掘調査は、本丸北不明門跡のほか、本丸北堀（北西隅部）の調査を行いました。その際、二ノ丸側から捨てられた『黒鯨瓦（くろしやちがわら）』が出土しました。

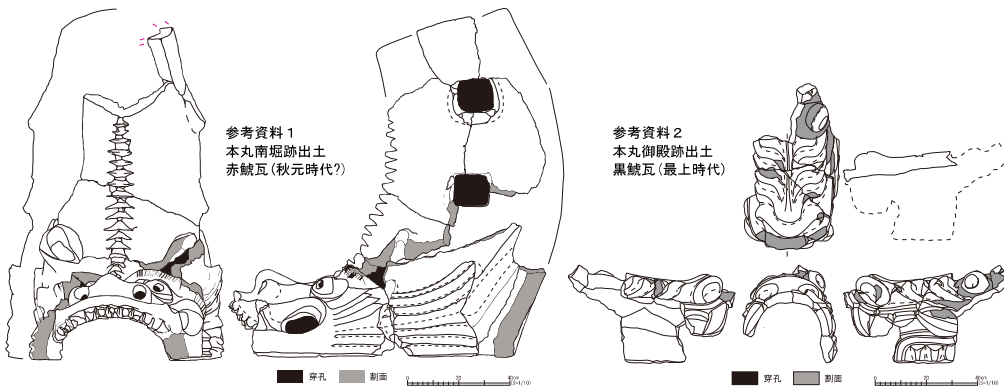
鯨瓦の顔から胴体の一部にかけての破片ですが、顔の表情が完全に残っています。現存長最大約38センチ・最大幅34センチ・現存高31センチあり、目・鼻・歯牙・耳?と体のウロコが表現されています。

下図に、これまで山形城で出土した鯨瓦の顔部分が残る資料を掲載しました。比較すると今回出土した鯨瓦は体部分だけで顔の高さの3倍はあります。尾まで含めると約5倍の高さとなるため今回出土した黒鯨瓦の全高は1.5mほどになると推定しています。

本来、鯨は櫓に使われるもので、最も近い建物は本丸乾櫓（北堀と西堀の隅部）ですが、二ノ丸側から捨てられており、元々どの鯨瓦かはまだわかりません。



本丸北堀北西隅部位置及び鯨瓦出土位置図



#### 編集後記

現地説明会開催に当たり関係各位に多大なご理解・ご協力を賜りましたこと厚く感謝申し上げます。なお、山形城跡の復原整備事業に係り関連する資料を探しています。お心当たりの方は下記までご連絡下さいますようお願いいたします。

【お問い合わせ先】〒990-8540 山形県山形市旅籠町二丁目3番25号 山形市まちづくり政策部公園緑地課 Tel.023(641)1212代  
【編集・発行】山形市企画調整部文化振興課 文化財係

#### 史跡山形城跡(2021) 本丸北堀跡・北不明門跡発掘調査 現地説明会資料

令和3年11月27日(土) 山形市 企画調整部 文化振興課

#### 調査要項

遺跡名	国指定史跡 山形城跡
所在地	山形市霞城町(霞城公園)
遺跡番号	1番(山形県遺跡地図)
調査期間	令和3年5月18日~12月10日(予定)
調査面積	本丸北堀跡・北不明門(きたあかずもん)跡 約1,500㎡
調査原因	史跡山形城跡(霞城公園)整備事業(文化庁補助事業)
遺跡種別	城郭(近世城郭)
時代	近世・近現代
遺構	堀跡・土橋跡・土橋石垣・護岸石垣 など
遺物	瓦類・陶磁器碗皿類・土師質土器・木製品・金属製品・石製品・須恵器土師器 など
調査事業の主体	山形市まちづくり政策部 公園緑地課
調査実施の機関	山形市
調査担当	山形市企画調整部 文化振興課

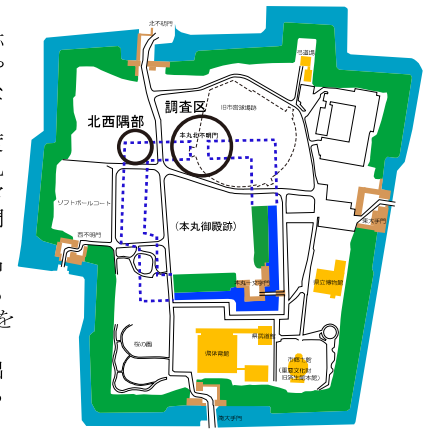
#### 1 概要(史跡の立地及び周辺の環境)

山形城跡は、最上義光が整備したといわれる本丸・二ノ丸・三ノ丸からなる平城です。昭和61年に国史跡指定を受けて以来整備に取り組み、二ノ丸東大手門や本丸一文字門石垣などを復原し、新たなシンボルとなっています。

平成23年度より本丸西堀跡の調査と整備、同24年度より本丸御殿跡の発掘調査を行い、最上氏時代の本丸の遺構を発見しています。令和元年度からは、旧市営球場跡地にかかわる「本丸堀跡・北不明門跡」発掘調査を文化庁の補助を受けて行っています。

城跡の周囲は市街地となっており、山形城はその中心に位置します。市街北部を流れる馬見ヶ崎川による扇状地上に立地し、本丸一文字門付近で海拔約130mを測り湧水地帯に築かれた平城と考えられます。

今回公開する「本丸北不明門跡」は本丸の重要な出入り口遺構であり、明治時代に破壊された状況が明らかになりました。



第1図 山形城跡調査区位置図

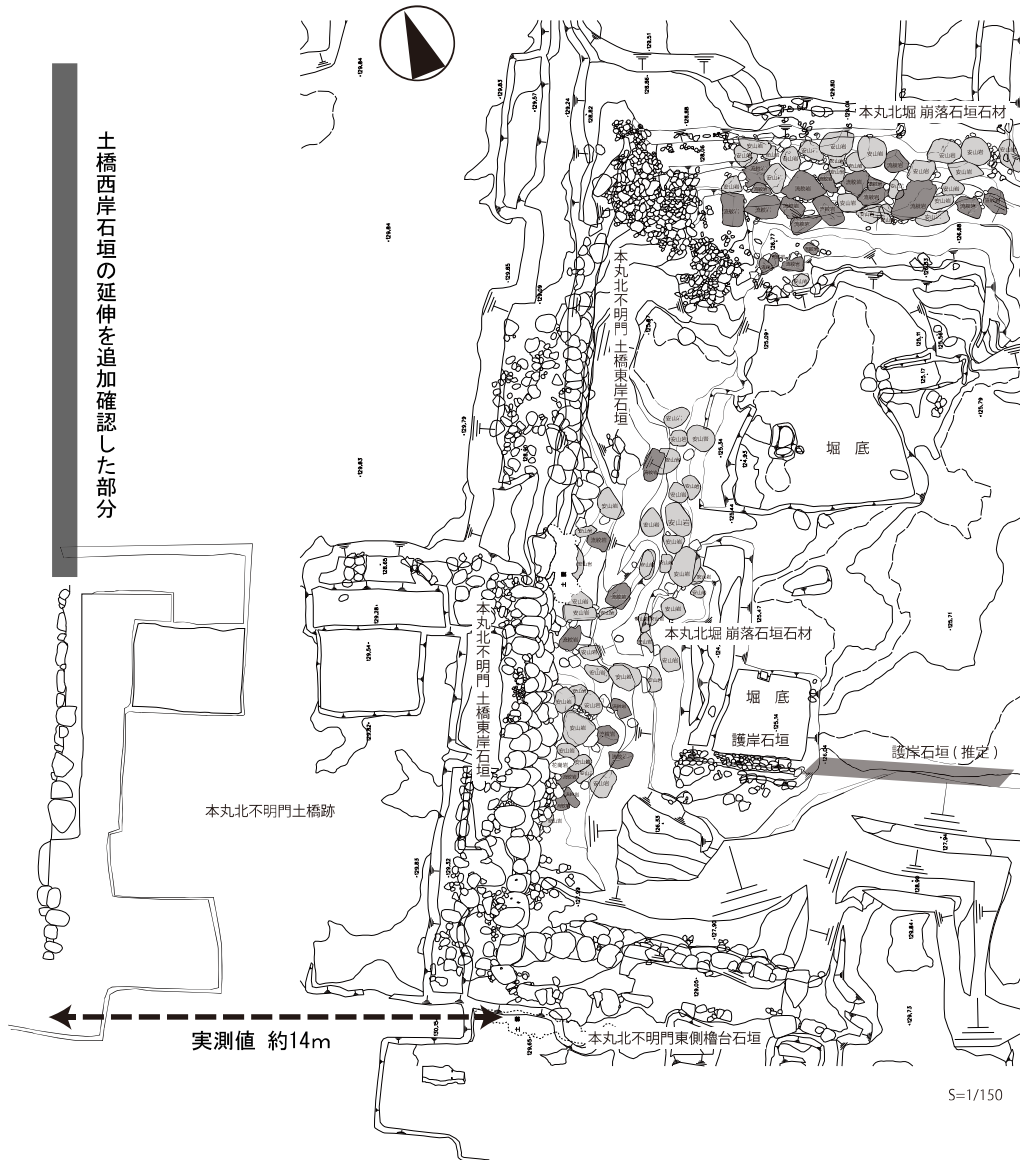
#### 歴代藩主年表

明治二年	弘化二年	明和四年	明和元年	延享三年	元禄十三年	元禄五年	貞享三年	貞享二年	寛文八年	慶安元年	正保元年	寛永二十年	寛永十三年	元和八年	慶長五年	延文元年										
一八六九	一八四五	一七六七	一七六四	一七四八	一七〇〇	一六九二	一六八六	一六八五	一六七八	一六四八	一六四四	一六四三	一六三六	一六二二	一六〇〇	一三五六										
水野忠弘	水野忠精	秋元志朝	秋元久朝	秋元永朝	幕府領	(大給)松平乗佑	堀田正亮	堀田正春	堀田正虎	(奥平)松平忠雅	(奥平)松平忠弘	(結城)松平直矩	堀田正仲	奥平昌章	奥平昌能	(奥平)松平忠弘	(結城)松平直基	幕府領	保科正之	鳥居忠恒	鳥居忠政	最上家信(義俊)	最上家親	最上義光	斯波兼頼	藩主
五万石	六万石				六万石		一〇万石	一〇万石	一〇万石	一〇万石	九万石	十五万石	十五万石	二十万石	二十万石	二十七万石	五十七万石									石高

## 2 本丸北堀跡及び北不明門土橋跡

【本丸北堀・土橋東側堀跡平面図】～土橋東岸石垣配置及び明治期の本丸堀埋め立てに伴う廃棄石材～

本丸北不明門土橋は本丸と二ノ丸を繋ぐ通路で、本丸では唯一の「土橋」です。その長さは28mで東西両岸に石垣を伴います。本丸側には北不明門の櫓台石垣の基礎部分が検出され、その下部（土塁裾部分）には堀水に対する「護岸石垣」が構築されていました。一方二ノ丸側は石垣などを伴わない「土羽(どは)」です。堀内には、明治時代に旧陸軍が解体したと考えられる石垣石材が、極めて多数廃棄された状態で見つかりました。石の種類は安山岩・流紋岩等複数の種類が認められます。馬見ヶ崎川流域で産出される石が使用されたと考えられます。



## 3 絵図に描かれた本丸北不明門

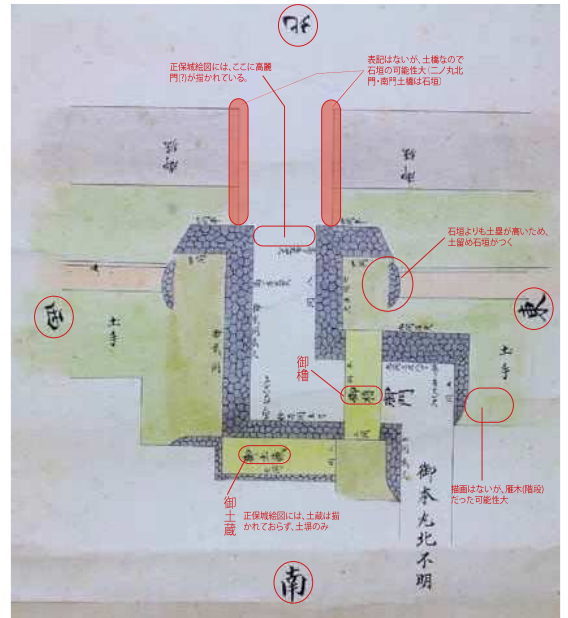
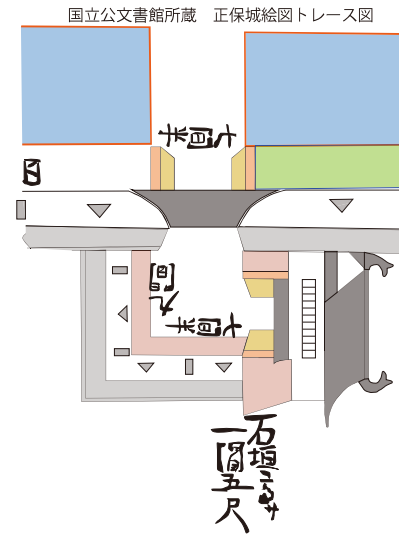
【絵図に見る本丸北不明門と調査成果】

右絵図は、江戸時代後期（18c後半～）の本丸北不明門を描いており、石垣・堀・建物の配置と実測寸法を記載したものです。「御本丸北不明」と書かれている本丸郭からカギ折れ（食い違い）状の石垣と堀に架かる通路が描画されています。

堀に面した石垣は、土塁の途中から築かれた状態で描かれていますが、発掘調査でも土塁の中段より築かれた石垣が見つかり絵図の精度が高いことがわかります。また絵図では、左右一対で「半月状」の石垣描画がありますが、これは土塁よりも石垣が低いため、土塁の上部を土留めするための石垣があったことを示していると考えています。

一方、下絵図は江戸時代前期（17c半ば）の本丸北不明門ですが、土橋の端に「高麗門」に相当する建物があります。『七間半（約13.6m）』とあります。発掘調査で検出した土橋の両岸石垣間を測ると約14mありました。七間半が門の柱間をさす場合、やや広い14mでも十分整合性を保つと言えるでしょう。

一方、下絵図は江戸時代前期（17c半ば）の本丸北不明門ですが、土橋の端に「高麗門」に相当する建物があります。『七間半（約13.6m）』とあります。発掘調査で検出した土橋の両岸石垣間を測ると約14mありました。七間半が門の柱間をさす場合、やや広い14mでも十分整合性を保つと言えるでしょう。



山形市郷土館蔵 秋元氏時代北不明門絵図（一部加筆）

